
東方真庭語

ミスターサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方真庭語

【Nコード】

N3133S

【作者名】

ミスターサー

【あらすじ】

刀語の真庭忍軍を幻想入りさせてみた小説です

首狩りの蠮螋（かまきり）

・・・ここはある世界、幻想郷

この森に一人の男性が居た、彼の名は「真庭蠮螋」・・・忍者だ
しかし、彼・・・「蠮螋」は派手な服装だ

とりあえず蠮螋は一度死んだ・・・

蠮螋（それは、記憶に有るのだが）

蠮螋は右手で顎を撫でて、考える・・・

すると後ろから「ガサ・・・ガサ・・・！」と草が揺れる

蠮螋「！、なんだ？」

蠮螋は身構えた、これは正しい判断だろう

何故ならば見知らぬ土地で下手に動くと身を滅ぼす

さらに野生の動物ならば楽に殺せて食糧を手に入れる事が出来る

ガサ

出てきたのは金髪の少女だった

蠮螋（藪をつつくと蛇が出る・・・とは聞いた事は有るが、まさか
少女が出るとは）

すると少女は「あ・・・」「と言い

「貴方は食べて良い人間？」

螻螂「食人種なのかお前は？ダメに決まっている」

「お前じゃない、ルーミアだ」

螻螂「ではルーミア、お前は人間と猪・・・どちらが量があると思
う？」

ルーミアと自ら紹介した少女は「人間？」と答えた

螻螂「いや猪だ、とりあえず近くに人が住んでいる場所に案内をし
てくれ

無論、タダではない・・・猪とか出てきたらソイツを斬り、お前に
やるっ」

ルーミア「分かったー、条件を飲むのだー」

螻螂「交渉成立だな、では頼む」

ルーミアは「ふよふよ」と飛び、螻螂はルーミアの後をついて
行った

ただ謎が・・・疑問が有る螻螂

螻螂（なんで飛べるんだ？）

と・・・

真庭忍軍、十二頭領の一人『真庭螻螂』・・・幻想入り

首狩りの蠅螂（かまきり）（後書き）

蠅螂「ところでルーミア」

ルーミア「なんだー」

蠅螂「変な事を聞くが・・・なんでお前は飛べるんだ？」

ルーミア「妖怪だから」

蠅螂（俺を殺した化物の次は妖怪か・・・）

蠅螂「ありがとう」

ルーミア「なのだー」

増殖の人鳥（ぺんぎん）

真庭 人鳥は幼き小柄な童子だ

人鳥は今、紅い館・・・紅魔館の目の前に居る

人鳥「あ、あの・・・！」

人鳥は門の前で立ちながら寝てるチャイナ服が着ている女性に話かける、が・・・

「ZZZZ」

寝ている

人鳥はもう、いつそのこと無断で入ろうか・・・と考えた時チャイナ服を着た女性の頭に銀のナイフが刺さった

「イダア！」

人鳥「ひっ、ひいいい！」

人鳥は身を退いた、何故なら人の頭に普通ナイフが刺さったら死ぬはずなのに生きているから

「寝てるんじゃないわよ中国」

人鳥「こ、今度は気配もなく出てきた!？」

そして突然、門番の横に現れたメイド服を着た女性が現れた

「あら？小さなお客さんじゃない」

すると人鳥に気が付いたメイド服の女性はしゃがんで人鳥の頭を撫でる

人鳥「あう、あう！あ、あの！や、止めてください！」

「良いじゃない、私は咲夜よ」

人鳥「ぼ、僕は真庭人鳥でしゅ！」

咲夜と紹介した女性はとりあえず

咲夜「で人鳥はなんでこんな場所に？」

人鳥「ぼ、僕が知りたいです・・・たしか僕は殺されたのに・・・な、なんで？」

咲夜「・・・なるほどね、死んだのちに入ってくるパターンね」

「とりあえず咲夜さん、ナイフ抜いて渡します」

すると会話をしている最中、ナイフが頭に刺さっていた女性がナイフを抜いて、咲夜に渡す

人鳥「ギャアアア！生きてるう・・・」

そして遂に人鳥は気絶した

真庭 人鳥、幻想入り

「あ、気絶しちゃいましたね」

咲夜「アンタのせいよ」

長寿の海亀

『長寿の海亀』、それが彼の通り名だ

まあ長寿と付いているが老人ではない・・・彼は腰に刺突剣を差している元気な若者だ、中身はちょっと老けているが・・・

さて、彼・・・『長寿の海亀』こと真庭 海亀はゆっくりと一段一段、階段を登っている

場は幻想郷で白玉楼と呼ばれる場の階段を彼は上がってる

白玉楼・・・ここは死んだ者の魂が一時待機する場で、『あの世』に送り出される為の・・・

まあ、簡潔に言えば『あの世』に行くための休憩所だ

海亀「ふむ、やっと登ったの」

そして登りきった海亀は、門を飛び越し、中に入った・・・文字通りに

海亀「・・・」

「・・・」

が、しかし・・・海亀はついていない、運が向いていないらしい

侵入した先に、まさか刀を差した庭師とバツタリと会ってしまったからだ

庭師は少女で、周りにデカイ人魂がフヨフヨ浮いている

そして少女は抜刀、海亀を睨む

「貴様、ここは白玉楼と知つての侵入か！」

海亀「ふうむ、まさか人が居るとは分からなかった」

「何？」

海亀「いやー、すまんすまん、刀を納めてくれんか？」

「侵入者に対して納める剣ではない！」

やれやれ、と海亀は手を挙げ、こう言った

海亀「いや、ちょっと待て・・・待ってくれ」

「？」

海亀「要するにワシは入ってはダメな場所に入ってしまったのだな
分かった、別の所を当たるとしよう」

とそこまで言った瞬間、海亀は腰の刀を抜いた

少女はすかさず、刀でいなして直ぐ様、距離を取る

「ひひひ」と海亀は笑い、すつと前後に足を大きく開き、膝を
曲げて腰を落とす

そして左腕で構えた刺突剣の先端を少女に向けた

「名乗らせてもらう、感謝しろ……お嬢さん……？」

この……最高格好よくて、最高いかした、最高強い、最高もてもて、最高お金持ちの真庭忍軍『魚組』指揮官の真庭 海亀……通称『長寿の海亀』の名乗りを聞けるのだからな。

おや？名を言ってしまったか……

まあいい、真庭忍軍、唯一の剣士として推して参る」

のんびりと、そして余裕がたっぷりにあるような口調で海亀は少女に言った

「私の名は……妖夢、白玉楼の庭師であり、主を護る……守り刀だ」

そして二人の刀は鳥が羽ばたくと同時に激突した

真庭 海亀……幻想入り

そして理由

真庭 鳳凰こと『神の鳳凰』は今、幻想郷のトップである八雲 紫と面を向かい会い、話している

鳳凰「ふむ、螻蛄は人食い妖怪『ルーミア』と行動、海亀は交戦中、人鳥は保護、他の真庭忍軍の面々は

迷いの森に白鷺、蜜蜂、鴛鴦

湖では蝶々が氷妖精に追いかけられ

人里には狂犬

とある店に川獺

医者場所に蝙蝠

地霊殿では喰鯨が鬼と酒飲み対決・・・

まあ、仲間達が無事で良かった」

紫「私はさっきの三人、螻蛄・・・人鳥そして海亀の事を見せただけよ？後は言葉なのに何故、言い切れるのかしら？」

鳳凰「ふむ、強^しいて言えば・・・勘・・・だろうな」

紫「勘・・・ねえ」

鳳凰「だから我は安心したのだ、では質問がある……よいかな？」

紫「ええ、良いわよ」

鳳凰「まずは見知らぬ我等、真庭忍軍十二頭領を蘇らせてくれたのだ？まず主とは会った事はないはずだ
我が記憶と真庭の記録には無かったからな」

「暇潰しよ、暇潰し」と紫は答えた

鳳凰「暇潰し、か」

紫「ええ、暇潰し……それ以上もそれ以下でもないわ」

鳳凰「なるほど、暇潰しか……その理由は気に入った、我等は暇潰し程度の命らしいな
まあ、確かに虫のように人の命を奪ってきた我等が言える立場ではない……」

紫「……ところで」

鳳凰「ん？」

紫「この世界、つまり幻想郷にはルールが有るのは、ご存知かしら？」

鳳凰「ルール？ああ、外国で言う法律か」

紫「まず理性のある妖怪と人を殺してはダメ、理性のない妖怪は殺つても構わない」

二つ目、勝負ことはスペルカードルール……つまり弾幕ごっこでケリを着けなさい

三つ目、死んでも文句は言わない」

鳳凰「二つ目以外は分かった、伝えておく……しかし、弾幕ごっこは何だ？」

紫「弾幕ごっこは言わば、銃撃戦よ

そしてスペルカードと呼ばれる必殺技の札を使って戦うの

ちなみに弾幕には規定は無いわ、座薬だったり、クナイだったり、
人参にんじんだったり」

鳳凰「座薬？人参？……なんでも有りか」

紫「ここでは常識が通用しない場所よ、だから、なんでも有りなの
……ちなみに幽霊、神、妖精、妖怪、人、魔法使いという種が居る
わ」

鳳凰「分かった、それも理解した……さて我は仲間の収集に行きたいのだが、送ってくれないか？」

紫「あら？送るだけで良いのかしら？」

鳳凰「いや、一人回収したら、またここに連れて来てくれぬか？」

紫「お安い御用、任せなさい」

鳳凰「では……」

鳳凰は立ち上がり、合図をすると下から隙間が開き、落ちて行った

紫「さて・・・彼等を復活させたのは吉と出るか凶と出るか・・・
それにしても食えない相手ね・・・真庭鳳凰」

紫は誰も居なくなつた部屋そつで呟いた

生物（ナマモノ）・・・生き物？

「ゆっくりしてたってね、二人とも」

「は、はあ？」

「？は（ノモマナ）物生のこ、なんだ」

迷いの森に二人と一匹の生物（ナマモノ）が居た

まず二人・・・人を紹介したい

一人目、真庭忍軍十二頭領の虫組『真庭 蜜蜂』

二人目、同じく真庭忍軍十二頭領の鳥組『真庭 白鷺』

ちなみに二人は偶然に会い、単独行動は危険と感じて一緒に行動をしていた

そして今、変な生物（ナマモノ）と遭遇した

「わたしは、ゆっくりれいむだよ」

ゆっくり・・・幻想郷で饅頭が生物化したもの、よく解らないが子孫も増やすのが出来るという不思議な生物だ・・・元は饅頭なのに

さて、この『ゆっくりれいむ』は白鷺が発見し、その視線に気付いてしまい、冒頭に戻る訳だ

白鷺「・・・なかるえ喰」

蜜蜂「白鷺さん、食べちゃダメですよ・・・未知な場所で未知なる食べ物食べてはダメです」

「わたし、たべてもオイシクないよ!」

白鷺「だ物たれらえ与に物生ものむ挑に閑難、蜂蜜」

蜜蜂「いや、白鷺さん・・・そんな要らない挑む精神は止めてください

下手したら、お腹を下しますよ?」

「そ、そうだよ!わたし、オイシクないよ!たべられたらゆっくりできないよ!」

白鷺「・・・」

白鷺はニヤリと笑い、懐からクナイを出してゆっくり近づくと

蜜蜂「あの、白鷺さん?お腹減ったのなら兵糧丸へいりやうがんを食べれば」

白鷺「たい空が腹、したき尽うもは丸糧兵・・・」

蜜蜂「・・・そういえば確かに」

「わたし、オイシクないよ!オイシクないよ!」

ゆっくりれいむは焦る、そりゃそうだ・・・

何せ、自分が狩られて食われるという場だからだ

すると、ゆっくりれいむは有ることを思い出した

「わ、わたし！ひと、すんでいるトコロしってるよ！だからたべないでー！」

すると白鷺はクナイをしまい、蜜蜂はゆっくりれいむを頭に乘せた

白鷺「？か当本」

蜜蜂「必死なってますから本当でしょう・・・逃げたら僕の忍法で撃ちますから安心してください」

白鷺「ろし内案・・・りくっゆ」

「ゆっ！わかった！ゆっくりいこっ！」

すると二人はゆっくりれいむを睨むと、ゆっくりれいむは少し泣き始め、「いそぐからやめてええ！こわいかおしないで！」と懇願し、案内した

白鷺「にか確」

蜜蜂「人が住んでそんな西洋の家ですね」

「ゆっくりうそつかない！ゆっくり巢にかえる！」

そう叫んだゆっくりれいむ

するとドアが開き、突然出てきたムチが蜜蜂の上に居たゆっくりれいむに直撃、中身の餡あんが出て絶命した

蜜蜂「ゆっくりさあああん！」

白鷺「なだラヤキち落出」

すると一人の女性が「五月蠅い」と呟きながら出てきた

「あれ、白鷺さんに蜜蜂じゃないか」

白鷺「・・・あ」

蜜蜂「鴛鴦さん」

現れたのは真庭忍軍十二頭領の鳥組、『真庭 鴛鴦』だった

生物(ナマモノ)・・・生き物?(後書き)

ゆっくりは虐待しちゃった・・・ゆっくり好きな方はゴメンなさい

鴛鴦（おしどり）と人形使い

真庭忍軍十二頭領の鳥組『真庭 鴛鴦』はムチを使う真庭の頭領だ
鴛鴦は今、アリス・マーガトロイドという金髪の少女の家に居てソ
ファーに座り、アリスと面を向かい合い、見ている

アリス「貴女、珍しいお客よ・・・なにせ、私の家の前に倒れてた
のだから」

鴛鴦「すまないね、私は鴛鴦、真庭鴛鴦」

アリス「アリス・マーガトロイドよ、アリスで良いわ」

鴛鴦「なら私は鴛鴦で・・・」

するとティーカップとポットを持ってきた浮かんでいる人形がセツ
ティングし始めるのを鴛鴦は気付く

鴛鴦「!?!? な、な、なな!なんで人形が空を飛んでるんだい!」

アリス「ああ、貴女・・・外来人だったの?

安心して、あの子達は貴女に被害を負わせないわ・・・
だって私の糸で操ってるもの」

鴛鴦「外来人?なんだい、それ?」

アリス「私も詳しくは解らないけど、簡単に言えばここは貴女が住
んでいた世界ではないのよ

この世界はどの世界から隔離されてるの・・・

忘れられた人や化け物が集まる世界、別名『幻想郷』・・・それがこの世界よ

外の世界から来た人達の事を外来人っていうの」

鴛鴦「あまり信じられないね、なんと言うか・・・忍法の域から離れてるから」

アリス「忍法？ああ貴女は忍者なのね」

鴛鴦「外来人と言うのは理解したわ、けど人形を操ってるのはアリス、アンタの忍法なのかい？」

アリス「いいえ、忍法じゃなく能力よ」

鴛鴦「忍法じゃなく能力？」

アリス「そ、能力には色々あるの・・・

空を飛ぶ、魔法が使える、運命を操るとか十人十色・・・私のは『人形を操る』程度の能力よ」

鴛鴦「なるほどね」

すると一体の人形がやって来てセッティングが完了した事を伝えに来た

「シャンハイ」

アリス「ありがとう、上海」

するとアリスは鴛鴦の手を取り、「お茶を飲みながら話しましょう？」
と言う

鴛鴦はそれに賛成し、お茶と菓子がセッティングされたテーブルに
向かう

しばらく時間が経ち、鴛鴦とアリスは仲良くなっていた

鴛鴦「って訳」

アリス「フムフム・・・恋愛って深いよね」

すると外から騒ぐ音がする

アリス「あら？誰かしら？」

鴛鴦はムチを取りだし、アリスは先程の人形・・・上海にドアを開
けさせ、鴛鴦はムチを飛ばす

パン！

ブチユ!

「ゆっくりさあああん!？」

「なだラヤキち落出」

鴛鴦はこの二人の声に気付き、外に出ると昔殺された真庭忍軍十二頭領の二人が居た

鴛鴦「あれ、白鷺さんに蜜蜂じゃないか」

鴛鴦は自然にそっ口に出ていた

白鷺「・・・あ」

蜜蜂「鴛鴦さん」

真庭忍軍十二頭領

『真庭 鴛鴦』

『真庭 白鷺』

『真庭 蜜蜂』

・・・幻想入り

以下オマケ

アリス「うわ！？貴方、なんで頭に餡が有るの！！！」

蜜蜂「すみません、あの・・・お風呂を貸していただけませんか？」

アリス「お風呂はないけど、シャワーなら有るわ

あの廊下を右に曲がると有るわ」

蜜蜂「すみません、お借りします」

アリス「ええ、しかし今さらだけど三人とも派手^{はで}で個性的な服を着てるわね・・・本当に忍者？」

白鷺「？なかうそ？手派」

鴛鴦「そうかねえ？」

蜜蜂「そつでしようか？」

「シャンハイ・・・？」

蠅螂と魔法少女（前書き）

「

名前

ここからは台本書きはしません、出来るだけですが

蠅螂と魔法少女

時は夕方

蠅螂は今、川で猪の肉を焼いている

その近くではルーミアがその肉を食している

「美味しいか？」

「美味しいぞー！蠅螂、お前も食うかー？」

「私はいい、それはお前の報酬だからな」

「そーなのかー」

蠅螂は少し笑うと自分の忍法を使用した手を川で洗い、上を見た

（空をゆっくりと眺めるのは久しぶりだな）

真庭忍軍十二頭領もやはり人の子、久しぶりゆっくり出来る時間が子供の頃以来無かった

（急ぐと死に繋がるか・・・海亀殿ののんびりな性格が必要だん？）

すると上から綺麗な星が蠅螂に目掛けて落ちてきた

「な！」

蠅螂は身を退き、回避する

そして上を再び見ると箒に股またがった如何いかにも魔法少女的な服を着た少女が居た

「やるじゃないか!」

そしてスーと降りてきて、箒から降りた少女は蠅螂にそう言う

そして蠅螂は少女に近づき、拳骨けんこつをした

ゴチ!

「痛ッ!!なにするんだぜ!」

「それはこちらの台詞だ!なんだ!いきなり攻撃するとは!

死ぬかと思ったぞ!あの世のあの世に送る気か!」

「うおう!なんかスゴいツツコミが!」

「・・・とりあえず貴様、名は?」

「言う前にお前が名乗れよ!」

「真庭蠅螂、次は貴様だ」

「うっ、魔理沙だぜ」

「では魔理沙、聞こう・・・人里はどっちだ?」

「人里?」

するとルーミアが全ての肉を食い終わり、ふよふよ飛んで蠍の頭に乗っかる

「お、ルーミアじゃないか！蠍、お前・・・ルーミアを手懐けたのか？スゴいな！」

「スゴいのか？」

「あらかたの外来人はソイツに喰われるんだぜ！」

猪やってよかったああ！と蠍は心底から思ったそうな・・・

閑話休題

「では魔理沙、人里まで送ってくれぬか？歩きだと時間が掛かるし、未知な森で野宿になると危険が増すからな」

魔理沙「お安い御用だぜ！ほら！」

魔理沙は箒に股がると箒の後ろをポンポンと叩く

そして蠍が乗ると箒が浮かび上がる

「ではな、ルーミア・・・また会おう」

「いつちょうのかー？」

「暇な時は会いに行くから安心しろ、今度は一緒に狩りでもしよう」

「わかったー、じゃーなー蠘螂」

「ああ」

そして空を飛んで去っていった蠘螂だった

「あれ？そーいえば、魔理沙が幻想郷準最速なの知って乗ったのかなあー？」

場に残ったルーミアはそう言った

ちなみに蠘螂は・・・悲鳴を上げて必死に落とされないように耐えていたのだった

「魔理沙殿！少し速度をーー！」

「何いつてるのか聞こえないぜ蠘螂！」

ゆっくり夫婦はピエロなのか？

湖にとあるゆっくり夫婦が居た

夫、ゆっくりまりさ

妻、ゆっくりぱちゅりー

の二匹だ

「ゆっくりしたいぜー！」

とゆっくりまりさが言つと

「たべものはこんだら、おうちにいる、おちびちゃんとのびの〜び
しましょ？」

と返事を返す

妻のぱちゅりーは頭が良い、文字なら辛^{かる}うじて読める頭だ

「ゆ、そうだな！おちびちゃんとのびの〜びするぜ！」

そして、まりさは頭に乗せてる熟しすぎて落ちた桃を落とさないよ
うにバランスを取る

が、この夫婦に危機が迫っていた
それは

「ゆっ、ゆっ！」

ゲスのゆっくりれいむがこの夫婦の前に現れたのだ

ゲス・・・酷い表現だが事実、ゲスと呼ばれる理由は沢山ある

捕食類ではないのにゆっくりを食い

留守中の家には勝手に入り自分の家だと勝手ながら言いつて乗っ取り

農園の物を勝手に食い・・・ちなみに夫婦のゆっくりは農園の人から要らない桃を貰ってるからあしからず

あとは言葉遣いが悪い

子供から菓子を奪い

と、まあ・・・例を挙げるとこのようになる

つまりサイテーな奴だ

ゲスゆっくりは言う「おまえらのあまあま（中身）か、ももよこせ！」と

「ぶざけるんじゃないぜ」

「そーよ、ゲスにやる、たべものはないのよ！

このたべものは、わたしたちのおちびちゃんにあげるものなの!!」

「なら、おまえらのあまあま・・・よこせえええ!!」

短気だったのかゲスは飛び上がり、ゆっくり夫婦に襲いかかる・・・

が突然、何かに追われている一人の人間がゆっくり夫婦とゲスの間

に偶然にも入ってしまい、人間はゲスを押し飛ばして逃走を続けて見えなくなる

当然、ゲスゆっくりは木に激突した

「もっどゆっくりじだがっだ・・・」

そう言い、中身の餡を出しながら木からズルズルと落ちていき、死んだ

が、ゆっくり夫婦のまりさとぱちゅりーは喜び、先程・・・何かから追われている人間の方向にお礼を言う

「ゆっ！にんげんさんがたすけてくれたぜ！ぱちゅりー！」

「ゆゆくん、ありがとう」

が、ゆっくりぱちゅりーは「ありがとう」の先は言えなかった

何故なら先程の人間を追いかけている氷妖精ルノ・・・別名？によつて氷漬けにされたのだから

「待てえええ！アタイの楽しみを奪った奴ううう！」

そして氷漬けにした事を謝りもしないでそのまま、まりさの頭上を通り過ぎる

ハッ！と意識を取り戻したまりさは、妻ぱちゅりーに近づくと

「ぱちゅりー！しっかりするんだぜ！ぱちゅりー！！！」

「・・・」

だが返事がない

「ぱちゆりいいい！ゆっくりしてね！ゆっくりじでね！」

まるで喜劇から悲劇に変わった瞬間だった、自分達を襲ってきたゲスは死んだが代わりに妻が死んでしまったと言う惨劇

まるで、ゆっくり夫婦は運命に遊ばれるピエロみたいだった

まりさは泣きながらぱちゆりーの前で泣く

すると今度は草むらから真庭 鳳凰が出てきた

「ゆっ・・・ゆっ」

「そこの生き物、なんで泣いておるのだ？」

会ったばかりの見知らぬ人間だが訳を聞かせていただけのかな？」

まりさは氷漬けにされたぱちゆりーを交互に見て、こう言った

「ぱちゆりーが・・・ぱちゆりーが・・・！」

それに理解した鳳凰は頷く

「ふむ、なるほど・・・最愛の物が氷漬けにされたのか・・・」

「御愁傷様だな」と二秒後付け加えた

「ゆっゆっ！にんげんさん！ぱちゅりーをたすけて！」

「・・・良いだろう、ただしお前の大切な物を氷漬けにした奴がどつちに行っただのか教えてくれぬか？」

「ゆっ！？それだけなら、わかったぜ！だからたすけてくれ！」

「では・・・忍法」

そしてぱちゅりーは無事救出され、一命を取り止めれた

ゆっくりまりさは氷漬けにした奴の方向を報酬として鳳凰に教え、別れた

ゆっくり夫婦はピエロなのか？（後書き）

鳳凰さんが影薄い・・・泣きたい

鳳凰ファンの皆様、すみませんでした

赤い屋敷と運命崩し

ペンギンは今、咲夜の後ろを歩いている

ちなみに人鳥がペンギンに変わった理由は、ただなんとなく思っ
てほ……（ブズ！
ウギヤアアアアア！！

「あ、あの、何に投げたんですか？」

「気にしないで頂戴」

「はあ？」

「さて」

と咲夜はある部屋で足を止める

「ど、どうしたんですか？」

「いえ、この屋敷の主に会っていただきたいのです
独断とはいえ、アナタを屋敷に入れてしまいましたから」

「な、なるほど！」

そして咲夜がドアを開けると人鳥と同じぐらいの背の女の子が椅子
に座りながらテーブルで紅茶を飲んでいた、かわいらしい女の子・

ただ違うのは蝙蝠の羽が背中に生えていた事だ

「あら、咲夜……どうしたのかしら？」

「ティータイム中、失礼します……お嬢様
勝手ながら、人を入れてしまったので謝罪と許可を貰いに来ました」

「あら、気にしなくて良いわ……運命を見たから……」

そして羽の生えた少女は椅子から降りて、人鳥に近付く

「あ、あの……初めまして……ま、真庭、人鳥です」

「自己紹介ありがとう、レミリア・スカーレット、吸血鬼よ」

「きゅ、吸血鬼ですか？」

「ええ、恐いかしら？」

「いえ、あの……」

「まあ、良いわ……」

咲夜、小さなお客様にお茶を……紅茶で良いかしら？」

「え、いや、あの……紅茶とは何ですか？」

「知らないの？紅茶を？」

「す、すみません……」

「簡単に言えば異国のお茶よ」

「で、では、そ．．．それを」

「咲夜」

「かしこまりました」

そして咲夜は消え、再び現れる

その間、わずか二秒

「ひっ！！」

「お持ちしました、お嬢様」

「ご苦労様、下がっていいわ」

そして咲夜はテーブルにティーセットを置き、レミリアの言葉を聞くと一礼して消える

「ま、また、消えた？」

「ふふ、無理もないわ．．．咲夜の能力だもの
とにかく、お茶を飲まない？」

人鳥はキヨロキヨロと辺りを見ながらレミリアの向かい合うように椅子に座る

「レ、レミリア．．．さん、聞きたいのですが．．．ここは日本で

は……ないですよね」

「そうね……けど理由は有るの？」

「え、えっと、貴女の着てる東洋の服に……館、森とかです」

「成る程」

「けど、き、気になる事が……外壁にあるツタや廊下や室内の壁にある日焼けの跡とか有ったのですが……この部屋には無いですよ、冗談だと思いましたが……本当に吸血鬼ですね」

「ふふ、完璧な推測ね、気に入ったわ……」

「……どうするんです？僕を食べるんですか？」

「……食う？まさか」

「え……？」

「運命崩し、面白い能力だもの……だから食べないわ」

人鳥は初めて自分の忍法、運命崩しに感謝した日だったそうだ

「で、人鳥……お願いが有るんだけど……」

「え？は、はい……」

「妹と遊んでくれないかしら？」

「え？」

赤い屋敷と運命崩し（後書き）

人鳥さん・・・大丈夫かな？

人鳥と495年の孤独な少女

人鳥は今、地下室に案内されていた

それは前の回、レミリアの話から始まった事からだ

「遊ぶ？誰とですか？」

「私の妹、フランドール・スカーレットよ」

「フランドール・スカーレット？」

「そう、フランドール・・・愛称はフランよ
今、あの子は地下室に幽閉しているの」

「ゆ、ゆ、幽閉？」

「そう、理由は、精神異常なの」

「・・・」

「で、貴方と遊んでほしいの・・・私の妹は精神異常ゆえに幼い子供、穢れを知らない子供なの」

「・・・い、命の危険は？」

「危険は有るわ、けど報酬を出すわ・・・」

この館に住む権利と食事を提供するの・・・どつ？」「

「・・・」

人鳥は迷う、確かに未知の土地で自由に歩いていたら人鳥の攻撃忍法である室内用の『忍法柔球術』が使えない

それに住む場所が有れば、紅魔館を拠点にし、もし幻想郷に来てる真庭の頭領を見つけられるかもしれない

人鳥は依頼を受ける為に頷いた

地下室

人鳥は恐る恐る、鉄の扉を開け、覗く

そこには奇妙な羽が付いた少女が居た
頭から破れ、綿が出ている熊のぬいぐるみで遊んでいた

「
」

鼻唄を交えながら・・・

「・・・」

人鳥はそれを見て、なんだ普通の女の子みたいじゃないかと想うが、この考えは直ぐに破棄される

訳は人鳥に気付いた少女の目が狂気の間違ったからだ
獲物を狩るような目、人鳥は後退りする

「あなたは、だあれ？」

少女は言う

「・・・ま、真庭 人鳥です」

「ふうん、私はフランドール・・・よろしく」

「は、はい」

「で、人鳥・・・貴方が新しい玩具？」

「玩具？玩具って？」

「何処まで耐えきれるかしら？」

「へ？」

そう言いつつ人鳥は地下室に入ると

チツ・・・と頬に何かが微かに当たり、頬から血が出てくる

「あれえ？私は当てたつもりなんだけど

ねえ、なんで当たらないの？」

「・・・え！？」

人鳥は焦る、いつ、どうして、どういった経緯で自分の頬に傷つけたのか・・・

人鳥は、考えるのを止め、直接自分の頬を傷つけた本人に聞くこと

にした

「あ、あの、どうやって、僕の頬に傷を付けたのですか？」

「あれ？あなた、弾幕を知らないの？なら教えてあげる

弾幕ってのは、エネルギーの塊や咲夜みたいにエネルギーがない人間はナイフを投げるの・・・

つまり投げられる物なら、弾幕になるの・・・
分かったなら、続きをしましょう？」

人鳥は、理解した・・・

「あ、あの、最後に」

「ナニ、ハヤク、アナタを壊させてヨ！！」

「あなたのお姉さん、レミリアさんから札を二枚貰いました・・・
これは？」

「・・・スペルカードよ、簡単に言えば、技や能力の力を入れて、
弾幕ごっこに利用するの！！」

「・・・なら貴女は、僕に勝てません
物投げ、当てる・・・そんなのは効きません！

僕は、最年少の真庭忍軍十二頭領の一人『増殖の人鳥』、そして真
庭忍軍の中でも強運が長けてますから！」

「なら、簡単二壊れナイデネ！！」

「行きます！！」

人鳥の生死を賭けた弾幕ごっこが幕を上げた

読む男、用途が分かる男

「・・・森近」

「なんだい、川獺」

「アンタ、ガラクタ集めが趣味なのかい？」

「ガラクタとは酷いな川獺」

場は香霖堂、真庭 川獺かわつそこと『読み調べの川獺』は香霖堂の亭主、森近 霖之助によって拾われた

場は無縁塚でだ、森近は、いつも通りにガラクタ・・・もとい道具を拾ってる時に川獺を発見し、ガラク・・・もういや、ガラクタでつまりガラクタを集めをしていたら川獺を偶然に見つけ、拾ったそうだ

47

「しかし、スゲエな・・・」

と川獺

「何がスゴいんだい？」

と森近は聞き返す

「いや、これは面白い物ばかりだぜ、森近・・・」

川獺は、戸棚から一つの商品を手に取り

「これは外の世界の一つ、パーソナルコンピューター
いわゆるパソコンって言うてな」

「ああ、パソコンか・・・僕も能力を使ったから、ある程度まで知
ってるよ」

「ところが、俺は生き物から物の過去を探れるんだ」

「つまり？」

「使用方法が分かる」

「へえ、君も能力者かい？」

「能力と言っても忍法だけ」

「そういえば、気が付いた時に言っていたね」

「まあな、道具だけじゃなくても木や石とかの過去を見れるぜ」

「へえ、僕の能力の強化したみたいな感じだね」

「お前の能力って分かんないがさ・・・少しは整理しようぜ
なんつうか・・・人が埋まってるぞ」

「え？」

「あれ」

川瀬が指をある場所に指すと、手が一本だけ出ていた

「うああああ！名もない妖怪さん、しっかり！」

「どっしたら、こっとなったんだ？」

川瀬は手で本棚を触り、忍法『忍法記録辿り』で物事の記録を辿った

『やい！黒白の魔法使い！』

香霖堂の亭主の物を盗むなんて、いい度胸してるじゃな『うるさい雑魚だぜ、恋符マスタースパーク！』ちよっ！おま！』

「なんだよ、この記録の混沌かもすは

おーい、森近、黒白の魔法使いって誰だ？」

「あー、たぶん魔理沙だね」

「なんか埋まつてる奴はソイツにやられたらしい」

「あーあ、とりあえず片付けと救出に手伝ってくれない」

「りよーかい」

川瀬は頭を掻き、本を一冊ずつ丁寧に重ねて妖怪の救出作業した

(あー、皆は来ているのか気になるなー・・・無事ならいいんだけど

ま、大丈夫だろ)

川瀬はそう思いながら視線を窓の外に向けた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3133s/>

東方真庭語

2011年11月6日03時08分発行